様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　５ 月 １７ 日現在

機関番号：１５４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ００３７３

研究課題名（和文）アフリカの小説にみる女同士の親密性

研究課題名（英文）Intimacy between Women in African Novels

研究代表者
大池　真知子（Oike, Machiko）

広島大学・ダイバーシティ研究センター・教授

研究者番号：９０３１３３９５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、アフリカの性の政治学を整理し、文学での性表象を明らかにした。
アフリカでは性をめぐり文化戦争が起きている。保守派は同性愛がアフリカの伝統に反すると主張する一方、欧米政府は性の人権尊重をアフリカに迫る。しかしアフリカでは多様な性が実践されてきたし、同性愛嫌悪は欧米の宗教保守の影響も大きい。一方でアフリカでは、性が命を生む結びつきとして聖化されてもいる。アフリカで性の多様性を尊重する活動をするには、宗教文化や社会運動の歴史に根ざす必要がある。一方、アフリカ文学では2010年代に多様な性が描かれるようになった。欧米のアイデンティティの政治に合致しない流動的な性が表象されている。

研究成果の学術的意義や社会的意義
日本では表面的にしか伝わってこないアフリカの性の政治学を、グローバルな文化戦争のなかに位置づけて整理し、日本の状況と比較した。それにより、日本の性と宗教保守が結びつく状況を、グローバルな視点で分析する有効性を明らかにした。さらに、アフリカの文学作品の性表象を分析することで、多様な性をアフリカの人々が日々どう実践しているかを明らかにした。とくに、欧米のLGBTQのアイデンティティの政治とは異なる流動的な性のあり方は、日本の性のあり方を再検討する視座を与えた。

研究成果の概要（英文）：This study reviewed the politics of sexuality in Africa and examined the representation of diverse sexuality in literary works.
First, a culture war over sexuality has been rampant in Africa. Conservatives argue that homosexuality is against African traditions, while Western governments press Africa to respect sexual human rights. However, diverse sexuality has been practiced in many parts of Africa, and homophobia is much influenced by Western religious conservatism. On the other hand, in Africa, sex is sanctified as a life-giving bond. Therefore, a movement for sexual diversity in Africa needs to be grounded in the local religious culture with local social movement methodology. Second, African literature began to portray sexual diversity in the 2010s. A fluid sexuality that does not conform to Western identity politics is being represented.

研究分野：英語圏文学

キーワード：英語圏文学　アフリカアフリカ　ジェンダー　セクシュアリティ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

（1）アフリカでは、1990 年代から複数の国家元首が同性愛嫌悪の発言をしていたが（Hoad 2007: xi-xiii）、2000 年代には同性愛嫌悪が社会に急速に広まった(Awondo et al 2012:147)。その結果、申請時の 2017 年には、同性愛嫌悪は「遅れたアフリカ」の象徴のように国際社会でとらえられていた。たとえばウガンダでは、同性愛を厳罰化する法案が 2009 年に提出され、2014 年に国会で可決された。これは手続きの瑕疵で差し戻しとなったが、ナイジェリアでは 2014 年に同性婚禁止法が成立し、同性愛行為はもちろん、同性愛を支援する活動も禁止された。このような苛烈な反同性愛の動きにたいし、欧米政府は援助と引き換えにアフリカ各国政府に圧力をかけた。だが、このように経済力をバックにして道徳に介入するやり方は、かえって地元の反発を呼ぶこととなった(Nyanzi & Karamagi 2015; Tamale 2013; Bennett & Reddy 2015)。

こういった状況のなか、アフリカの性にまつわる言説をアフリカの視点から整理する必要があると、研究代表者は考えた。とくに日本ではアフリカが身近でなく、「同性愛を差別する遅れたアフリカ」という一面的な見方が無批判に広まりやすい。じっさい、性にまつわる世界情勢が語られるときに、同性愛差別の象徴としてアフリカが取り上げられることが多いと、研究代表者は感じていた。そのため、アフリカの視点からみたアフリカの複雑な性の政治学を、日本の社会に発信する必要があった。

（2）一方、アフリカ文学では、2000 年代に、女性作家が異性愛の女の性を大胆に描く作品を発表するようになると同時に、黒人の男性作家が男性同性愛を作品化し始めた。2010 年代には、レズビアンやトランスジェンダーを主人公とする作品も発表され、多様な性の表象はアフリカ文学の一つのトレンドを形成中だった。

しかし、その学術的な分析は発展途上にあった。性をテーマとした最初の文学論集(Azodo & Eke）は 2007 年に出版されたが、文学論文 12 篇中、セクシュアルマイノリティを直接扱った論文は 2 篇にとどまり、2 篇ともヨーロッパを舞台にした作品の分析である。また、代表的な学術誌である *Research in African Literatures* では 2016 年にようやく、多様な性についての特集が組まれた。単著は、Stobie が南アフリカ文学の両性愛の表象について論じ（2007)、Zabus が社会背景を含めて広くアフリカの文学作品を論じた（2013)。しかし、前者は、扱う範囲が南アフリカのみで黒人の女性作家は論じられていない。後者は地理的、歴史的に広い範囲を扱っているが、その分、作品分析は手薄であった。

したがって、まずは、多様な性を中心的に表象する文学作品のマッピングが必要だと、研究代表者は考えた。マッピングに際しては、セクシュアルマイノリティの人物を主人公にする作品だけでなく、主人公らがホモエロティックな関係を結ぶ作品を対象とした。とくに、母娘、おば姪、祖母孫娘、姉妹、妻どうし、友人など、女性同士の親密な関係は、アフリカの女性文学で頻繁に描かれてきた。これらの関係を性的な次元で読み直すことで、アフリカの女性文学を再構築することも可能だと構想した。

２．研究の目的

(1)アフリカ文学の性表象の潮流をとらえることを目的とした。性を中心的に描く文学作品は 2000 年代から目立つようになった。まずはそれらの作品をマッピングすることを目的とした。さらには、2000 年代以前に出版された作品、とくに女性作家による作品を再読し、ホモエロティックな女同士の親密性という点から、アフリカ女性文学史を再構築することを目指した。

(2)上記の目的を果たす準備として、アフリカの性にまつわる言説を整理することも目的とした。当初は、フィールド調査によりアフリカの視点を明らかにしようとしたが、コロナ禍により十分なフィールド調査ができなくなったため、文献調査を中心とするよう変更した。そして、アフリカの現状を深掘りするよりは、日本の状況と比較することに重きを置くこととした。

３．研究の方法

当初は文献調査、アフリカのフィールド調査、作品分析を組み合わせて実施する計画を立てたが、コロナの広まりにより、アフリカのフィールド調査は１回にとどまり、文献調査と作品分析を中心に行った。

(1)文献調査：アフリカの性をテーマにした歴史学、文化人類学、社会学、文学の領域を中心に、主要な文献を読んだ。また日本の性の状況についても文献でレビューを行い、立体的に性にまつわる言説をとらえるようにした。

(2)フィールド調査：2019 年 12 月、ウガンダとケニヤで実施された 2 週間のワークショップ「東アフリカの身体文化」に参加した。これは、アメリカの NPO である CEDAR（https://www.cedarnetwork.org/)がウガンダの Martyrs 大学と連携して実施したものである。ワークショップでは、割礼すなわち性器の加工により、共同体の構成員をジェンダー化する習慣にフォーカスして、フィールドでのインタビューやディスカッションに参加し、共同体、ジェン

ダー、性、身体、人権、文化について考察した。

(3)作品分析：アフリカの文学作品で、女性の性およびマイノリティの性を中心に描く作品をテクスト分析した。

４．研究成果

(1)アフリカの文化戦争

アフリカの性にかんする文献調査により、性をめぐる問題が文化戦争の様相を呈していることを確認した。2000 年代以降、アフリカ各国で宗教や政治の指導者がたきつけて、同性愛嫌悪が社会で急拡大した（Awondo et al 2012:147）。ナイジェリア、カメルーン、ウガンダなど、複数のアフリカの国で、植民地時代からのソドミー法を実効化したり、厳罰化したりする動きが見られた。欧米の政府や人権団体はこのような動きを批判し、たとえばイギリスのキャメロン政権やアメリカのオバマ政権は、援助停止を口にした。アフリカの人々は、欧米の高圧的な態度に植民地主義を見て取り、それに反発し、結果的に同性愛嫌悪を強めることとなった（Bennett & Reddy 2015; Nyanzi & Karamagi 2015; Tamale 2013）。一方で、とくにアメリカのキリスト教右派は、同性愛嫌悪をアフリカ社会で広め、同性愛禁止法の法制化のロビー運動を進めた（Kaoma 2016）。つまりアフリカで 2000 年代に急拡大した同性愛嫌悪は、欧米の政府および非政府組織に影響され、それにたいする応答として形成されたといえる。

アフリカ内の政治に注目するならば、南アフリカが性の多様性の尊重を国是として掲げていることは、南アフリカと覇権を争う隣国ジンバブエやアフリカ第二の強国ナイジェリアで同性愛嫌悪が広まったことと無関係ではない（Hoad 2007）。

このようにアフリカの同性愛嫌悪の言説は、アフリカ内外の政治により形成されてきたが、その一方で、アフリカの社会に異性愛中心主義が根強いことも、否定できない。2019 年にウガンダとケニヤで行ったフィールド調査では、性が、男女が結合し命を育むスピリチュアルな結びつきとして神聖視されていることが示唆された。もちろん、多くの事例研究が示すように（Epprecht 2004; Hoad 2007; Murray & Roscoe 1998）、アフリカの各地で、同性間の性的な行為は実践され許容されてきたのであって、「同性愛はアフリカの伝統に反する」という言説は事実に反する。しかし、とくにアメリカの宗教右派が巨額の資金でもって喧伝した同性愛嫌悪を人々が受入れる素地として、命と結びついた性の聖化があることは、性の多様性をアフリカで推進する際に念頭に置くべきである。

したがって、アフリカで性の多様性の尊重を推進する際には、欧米流の個人の人権尊重だけでなく、アフリカの哲学と社会運動の歴史に根ざした訴えが必要である。たとえば、正義や敬意といった社会性あるいは共同性の強い価値観に訴えることが考えられる（Epprecht 2013; van Zyl 2015）。

以上の文献調査の結果は、2019 年 6 月 22 日に日本黒人研究学会の第 65 回年次大会学会で報告し、さらに詳しい分析内容を単著論文「1980 年代から 2010 年代のアフリカの性の研究の潮流――フェミニズムとの関わりを中心に」（大池　2020）にまとめた。また、文献調査にフィールド調査で得た知見を合わせ、さらに日本の事情と比較して、「アダム・B・セリグマン＆デヴィッド・W・モンゴメリ『人権の悲劇――リベラリズムと所属の喪失』――邦訳論文と訳者解題」（セリグマン、モンゴメリ、大池　2021）の訳者解題にまとめた。セリグマンは上記の NPO の代表である。

(2)日本の状況

日本の性の多様性をめぐる状況は、研究期間中に大きく変化した。2021 年、野党から「性的指向又は性自認を理由とする差別の解消等の推進に関する法律案」（いわゆる LGBT 差別解消法案）、自民党から「性的指向及び性自認の多様性に関する国民の理解の増進に関する法律案」（いわゆる LGBT 理解増進法案）が提示され、自民党案に「性的指向及び性自認を理由とする差別は許されない」という趣旨を法律の目的に加える与野党案として合意した。しかし自民党内の反対が強く、法案提出は断念された（二階堂　2021）。その後、2022 年 7 月に安倍元首相が統一教会信者の家族に殺害されたことをきっかけに、保守的な宗教団体がジェンダー政策に影響を与えているという認識が社会で共有された。ただし、ジェンダー研究では、保守運動によるバックラッシュとして、このことはすでに指摘されていた（山口等　2021）。なお、本文書執筆中の 2023 年度はじめには、2023 年 5 月に G7 サミットが広島で開催されるのを背景として、LGBT に関連する法制度がふたたび注目を浴びている。

文献調査により明らかになったのは、野党案と自民党案の 2 案の対立軸は、優先順位（人権擁護と差別禁止が先か、社会での理解を促進するのが先か）であるようにみえて、より根源的には、性と社会と個人の関係（性のあり方は個人が自己決定すべきか、社会の規範が決定すべきか）にあるということだ。

その意味で、日本の状況はアフリカの状況と共通している。アフリカで争点になっているのは「同性愛行為を法律で禁止すべきか」であり、日本の「同性愛差別を法律で禁止すべきか」とは大きく異なる。しかし背後にある対立は、性のあり方を個人が決定すべきか社会が決定すべきか、あるいは、性に関して個人の人権と社会の規範はどうあるべきか、にある。アフリカの場合、この文化戦争には、欧米の保守的な宗教勢力、欧米の人権団体、欧米のリベラルな政府、保守的な

ロシア政府などの諸勢力が複雑に関わっている。日本の場合も、それより度合いが少ないものの欧米の政府（アフリカのように経済援助を人質にとられることはないが、先進国としての地位がかかっている）や国内外の保守的な宗教勢力が影響を与えている。日本での性の多様性の議論を、世界的な文化戦争の一つの表れとしてとらえ直すならば、日本で性の多様性尊重を進めるには、急速な社会変化に対して人々が抱いている不安をなだめること、異なる価値を社会で併存させる暫定的な枠組みを妥協して作ることが、少なくとも必要だと結論づけることが可能となる。

以上の議論は、アフリカから日本を照射する視点により可能になった。この議論は上述の通り、人権と共同体の関係について論じた論文を研究代表者が翻訳し、その解題として、アフリカと日本の性についての状況を紹介する形で、成果発表した（セリグマン、モンゴメリ、大池　2021）。

(3)アフリカ文学

アフリカ文学では、2000 年代から、女性作家が性を赤裸々に表象する作品や、黒人男性作家がゲイの性を表象する作品が発表され始めた。2010 年代にはレズビアン、トランスジェンダー、インターセクシュアルを主人公とする小説も出版されるようになった。

多様な性を描く作品を横断的に読み解くことで明らかになったのは、いわゆるカミングアウトストーリー(セクシュアルマイノリティの人物が自分のセクシュアリティと悩みながら向き合い、アイデンティティを確立する、といった物語)とは異なるストーリーが、とくに 2010 年代以降の作品で見られることである。代表的には以下の 4 つのパターンが観察された。

①歴史小説で、登場人物が異性とも同性とも性行為をする。彼らはアイデンティティに悩むことはなく、愛情関係や支配関係の一様式として多様な性行為を実践する。ウガンダの 19 世紀の実在の男性首長と家臣の男たちとの性的な関係(Segawa 2016)やガーナの 19 世紀の女奴隷と王族の女性との関係（Attah 2018）を描く作品の例がある。

②現代小説で、同性愛ともトランスジェンダーともつかない人物やパンセクシュアルな人物が、多様で流動的な性関係を結ぶ（Addonia 2018;Emezi 2020）。そこには、欧米の人権言説で一般的な性自認と性的指向の峻別は見られず、性的指向の分類もされず、登場人物は、トランスジェンダーなのかホモセクシュアルなのか、ホモセクシュアルなのかバイセクシュアルなのかパンセクシュアルなのかといったアイデンティティの葛藤も経験することなく、関係を結びながら流動的に性を実践する。

③女たちの関係を描く家族の年代記で、主人公らが、レズビアンというアイデンティティは持たないが、女同士の身体的な結びつき（女性器の拡張の慣習を叔母から教わる、2 人の老婆が幼少期を回想して裸で遊ぶなど）を実践する。これらは、性と生を寿ぐ行為として、肯定的に描かれる（Makumbi 2020）

④欧米流のアイデンティティの葛藤を語る小説もあるが、主人公は、LGBTQ のアイデンティティでなく、伝統宗教の霊的な存在（たとえばイボ文化の、男でも女でもあり霊界と人間界を行き来して転生を繰り返すオバンジェ）の力を借りて解放を成し遂げる(Emezi 2018; Papillon 2021; Osunde 2022)。

このうち、流動的な性が難民キャンプの境界領域性の象徴とされる小説を単著論文「スレイマン・アドニア『私の母語は沈黙』にみる難民の詩学――あてにならない語り手が騙るクイアな性」（大池 2023）にまとめた。

文学史の読み直しは十分に行うことができず、論文にまとめることができなかった。概説ではあるが、『ジェンダー事典』(2023）の「アフリカ文学」の項目を担当し、アフリカ女性文学の展開、性表象の中心化、多様な性の表象などをまとめたことで、日本のジェンダー研究者が抱きがちな「性的に遅れたアフリカ」という一面的なイメージを払拭することに貢献した。

参考文献

Addonia, Sulaiman. *Silence is my Mother Tongue*. Indigo: London, 2018.

Attah, Ayesha Harruna. *The Hundred Wells of Salaga*. Abuja: Casava Republic, 2018.

Awondo, Patrick, et al. “Homophobic Africa? Toward a More Nuanced View.” *African Studies Review* 55.3 (2012): 145-168.

Azodo, Ada Uzoamaka & Maureen Ngozi Eke, eds. *Gender and Sexuality in African Literature and Film*. Trenton: African World, 2007.

Emezi, Akwaeke. *The Death of Vivek Oji*. New York: Riverhead, 2020.

---. *Freshwater* New York: Grove, 2018.

Bennett, Jane and Vasu Reddy. “‘African Positionings’: South African Relationships with Continental Questions of lgbti Justice and Rights.” *Agenda* 29.1 (2015): 10-23.

Cheryl Stobie. *Somewhere in the Double Rainbow: Representations of Bisexuality in Post-Apartheid Novels*. Scottsville: U of KwaZulu-Natal P, 2007.

Epprecht, Marc. *Sexuality and Social Justice in Africa: Rethinking Homophobia and Forging Resistance*. London: Zed, 2013.

Hoad, Neville. *African Intimacies: Race, Homosexuality and Globalization*. Minneapolis: U of Minnesota P, 2007.

Kaoma, Kapya. “An African or Un-African Sexual Identity? Religion, Globalisation and

Sexual Politics in Sub-Saharan Africa." *Public Religion and the Politics of Homosexuality in Africa*. Ed. Adriaan van Klinken & Ezra Chitando. London and New York: Routledge, 2016. 113-129.
Makumbi, Jennifer Nansubuga. *A Girl is a Body of Water*. Portland: Tin, 2020.
Murray, Stephen O. & Will Roscoe, eds. *Boy-Wives and Female Husbands: Studies in African Homosexualities*. New York: Palgrave, 1998.
Nakisanze Segawa. *The Triangle*. Print on demand. 2016.
二階堂友紀「これは闘争、ではない――LGBT 理解増進法案見送り」『世界』947 号（2021 年 8 月）：10-15 頁
Nyanzi, Stella & Andrew Karmagi. "The Socio-Political Dynamics of the Anti-Homosexuality Legislation in Uganda." *Agenda* 29.1 (2015): 24-38.
Osunde, Eloghosa. *Vagabonds!* New York: Riverhead, 2022.
Papillon, Buki. *An Ordinary Wonder*. London: Dialogue, 2021.
Tamale, Sylvia. "Confronting the Politics of Nonconforming Sexualities in Africa." *African Studies Review* 56.2 (2013): 31-45.
van Zyl, Mikki. "Taming Monsters: Theorising Erotic Justice in Africa." *Agenda* 29.1 (2015): 147-154.
山口智美・斉藤正美・荻上チキ『社会運動の戸惑い ―― フェミニズムの「失われた時代」と草の根保守運動』勁草書房 2012 年
Zabus, Chantal. *Out in Africa: Same-Sex Desire in Sub-Saharan Literatures and Cultures*. Woodbridge: James Currey, 2013.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計7件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 大池真知子	４．巻 92
２．論文標題 スレイマン・アドニア『私の母語は沈黙』にみる難民の詩学――あてにならない語り手が騙るクイアな性	５．発行年 2023年
３．雑誌名 黒人研究	６．最初と最後の頁 77-88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 大池真知子	４．巻 -
２．論文標題 変容の力宿す故郷への思慕『パープル・ハイビスカス』（チママンダ・ンゴズィ・アチーチェ著の書評）	５．発行年 2022年
３．雑誌名 共同通信社2022年6月22日配信（琉球新報、南日本新聞、福島民報など掲載）	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 大池真知子	４．巻 3555
２．論文標題 新しい花を咲かす未来の力――ナイジェリアの問題をポストコロニアルな世界でジェンダーの視点から語り直す（チママンダ・ンゴズィ・アチーチェ著『パープル・ハイビスカス』の書評）	５．発行年 2022年
３．雑誌名 図書新聞	６．最初と最後の頁 5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 アダム・B・セリグマン、デヴィッド・W・モンゴメリ、大池真知子	４．巻 2
２．論文標題 アダム・B・セリグマン＆デヴィッド・W・モンゴメリ「人権の悲劇――リベラリズムと所属の喪失」――邦訳論文と訳者解題	５．発行年 2021年
３．雑誌名 総合科学研究	６．最初と最後の頁 125－146
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 大池真知子	4．巻 89
2．論文標題 アフリカのフェミニストが語るアフリカの女の性――性暴力の被害者から快楽の主体へ	5．発行年 2020年
3．雑誌名 黒人研究	6．最初と最後の頁 26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 大池真知子	4．巻 89
2．論文標題 1980年代から2010年代のアフリカの性をめぐる研究の潮流――フェミニズムとの関わりを中心に	5．発行年 2020年
3．雑誌名 黒人研究	6．最初と最後の頁 86-106
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 大池　真知子	4．巻 88
2．論文標題 ヴェロニク・タジョの絵本『アヤンダ』が表象するアフリカの災厄と回復――アフリカを扱う日本語の絵本のなかに位置づけて考える	5．発行年 2019年
3．雑誌名 黒人研究	6．最初と最後の頁 96-110
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　5件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 大池真知子
2．発表標題 差別について議論できる大学であるために―私たちにできること 大学に望むこと
3．学会等名 広島大学主催シンポジウム　差別のないキャンパスを目指して（招待講演）
4．発表年 2022年

１．発表者名 大池真知子
２．発表標題 多様性の基礎的な考え方ーーとくに性の視点で
３．学会等名 広島市立広島みらい創生高等学校主催　令和4年度第2回教育相談研修会（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 大池真知子
２．発表標題 男女共同参画のそもそも論――男女ってなに？
３．学会等名 公益財団法人広島県男女共同参画財団主催　高校生向け出前授業（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 大池真知子
２．発表標題 多様性の基礎的な考え方――とくに性の視点で
３．学会等名 LGBTスタディーズ「性の多様性と教育――実践への第一歩」（公益財団法人、広島県男女共同参画財団主催の市民講座）（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 大池真知子
２．発表標題 アフリカのフェミニストが語るアフリカの女の性――性暴力の被害者から快楽の主体へ
３．学会等名 第65回黒人研究学会年次大会（招待講演）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計1件

１．著者名 松本悠子、伊藤公雄、小玉亮子、三成美保編	４．発行年 2023年
２．出版社 丸善書店	５．総ページ数 -
３．書名 ジェンダー事典（うち14章項目10「アフリカ文学」を担当）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

CEDAR
https://www.cedarnetwork.org/

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関